

## 第 140 回沖縄県医師会医学会総会

理事 天願 俊穂



### 第 140 回沖縄県医師会医学会総会日程

会 期：令和 8 年 6 月 14 日（日）  
 会 場：沖縄県医師会館  
 第 140 回沖縄県医師会医学会総会開会宣言  
 第 140 回沖縄県医師会医学会総会会頭挨拶 大湾 勤子  
 沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）Ⅰ  
 沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）Ⅱ  
 沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）選考委員会  
 一般講演（ポスター発表）  
 <日本専門医機構認定共通講習【医療倫理：1 単位】>  
 「意思決定支援の倫理を再考する  
 ～意思決定支援から共同意思決定へ～」  
 琉球大学病院 地域・国際医療部 特命助教  
 金城 隆展  
 <教育講演①>  
 「沖縄県における薬物非行の状況について  
 少年鑑別所の現場から」  
 那覇少年鑑別所 首席専門官 中山 章  
 <教育講演②>ランチョンセミナー  
 「脆弱性骨折から考える沖縄県の骨折診療  
 — 病態解明・治療戦略・予防への展開 —」  
 琉球大学 整形外科 診療准教授 仲宗根 哲  
 <教育講演③>  
 「沖縄県における小児救急医療の歴史と  
 持続可能な体制構築に向けた構造改革」  
 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター  
 副院長兼母子センター長 中矢代真美  
 沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）結果発表  
 分科会長会議

6 月 14 日（日）に大湾勤子会頭のもと、第 140 回沖縄県医師会医学会総会が、砂川博司医学会長の開会挨拶で始まりました。

会頭挨拶は、140 回という節目の回ということもあり、本医学会の歴史から始まり、本医学会の意義、今回のプログラムの特徴が語られました。また、現在の世界情勢を鑑み「足るを知る」姿勢を持ち、現状を最大限に活かす工夫と協力を生み出していかなければならないとの言葉もありました。

専門医共通講習は琉球大学病院地域・国際医療部特命助教：金城隆典先生による「意思決定支援の倫理を再考する～意思決定支援から共同意思決定へ～」でした。改めて IC と ACP について考える機会となりました。ACP の本質は「繰り返し行われるコミュニケーション」であり患者さんを中心として繰り返し話し合いを行うことで相互理解をより深め共に悩み考え、共に決定していくことが大切であるということを改めて学びました。

教育講演 1 は那覇市少年鑑別所：中山章首席専門官による「沖縄県における薬物非行の状況について 少年鑑別所の現場から」でした。普段馴染みのない施設ですが、その役割は「鑑別」「観護処置」「地域援助」の三つだということは初めてわかりました。以前に比べ薬物非行の低年齢化、特に中学生の割合が多くなっており、令和 3 年頃からは薬物非行による入所が増えているということでした。Gateway-drug として覚醒剤は減少しており、大麻が中心で、コカイン、MDMA、エトミデートが増加傾向にあり、さらに多剤乱用者が 45% もいることも驚きました。薬物の入手方法も SNS や秘匿性の高いアプリを使用してより複雑化していることも最近の特徴であるということもわかりました。医師会としても連携・協力していく必要性があると認識させられました。

教育講演 2 は琉球大学整形外科診療准教授：仲宗根哲先生による「脆弱性骨折から考える沖縄県の骨折診療一病態解明・治療戦略・予防への展開」でした。高齢者の骨粗鬆症を背景とする全身性疾患の局所表現である脆弱性骨折は今後も増加していくことは容易に想像されます。その原因、治療、再骨折の予防について大変わかりやすい講演でした。脆弱性骨盤骨折に対する経皮的骨盤スクリュー固定術は早期離床を促すだけでなく、TS screw 法など二次骨折の予防にもなることが理解できました。大腿骨近位部骨折も、より細かな解析を行って症例に最適なインプラントや固定法の選択を行うことが重要であることが示されました。脆弱性骨折に対する低侵襲治療、骨質評価、骨粗鬆症介入、再骨折予防を一体化した診療体制の構築が必要であることがわかりました。

教育講演 3 は沖縄県立南部医療センター・こども医療センター副院長兼母子センター長：中矢代真美先生による「沖縄県における小児救急医療の歴史と持続可能な体制構築に向けた構

造改革」でした。沖縄県が 14 歳以下の人口割合が全国 1 位だが、小児科医師の偏在指数は 44 位と低く需要と供給のバランスが崩壊しており、さらに総合病院の小児科医師の減少に歯止めがかからない状況であることが示されました。そのため小児オンライン診療との連携や那覇市立病院との「輪番制」を行うことで小児医療を支える持続可能なモデル構築を行なっているとのことでした。小児科医師の確保・定着を図るための医療政策の提言も行われ、診療科の垣根を超えた役割分担と連携の必要性を改めて感じました。

医師会の医学会賞（研修医部門）は 17 演題が出され研修医部門 I では沖縄県立宮古病院の下地美寧先生の「繰り返す問診と身体診察が診断の鍵となった感染性心内膜炎の一例」が、研修医部門 II では沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの池松優花先生の「慢性組織球性銃絨毛間腔炎による早発型重症胎児発育不全となった一例」が最優秀賞を受賞し、優秀賞は浦添総合病院の長尾来夢先生と沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの赤嶺雅斗先生が受賞しました。研修医の発表にかける熱意とそれを見守る指導医の温かい眼差しを感じるものでした。

一般演題は 50 演題でした。演題数の減少は参加人数の減少と連動しており各ブースでのディスカッションも昔の大勢で熱く語り、時間もオーバーするのが当たり前の頃を知っているものとしては少し寂しい感じがしました。

今回のような学会形式は年一回となり、来年 6 月の医学会総会是一般演題はなく、研修医部門と共通講習、シンポジウムが主となる医学会となります。時代と共に形を変えていきますが、本医学会が県内のすべての医師が集うコミュニケーションの場であることに変わりありません。今後とも会員皆様のご支援のもと、魅力のある会として継続していくことを願っています。

## 医学会頭挨拶（抄録）

第140回沖縄県医師会医学会総会会頭  
大湾 勤子



第140回沖縄県医師会医学会総会の開催にあたり、ご挨拶申し上げます。

本学会は現在、年2回の開催を重ねており、140回という数字は単純計算で70年の歴史に相当します。2000年刊行の『沖縄県医師会史』によれば、第1回沖縄医学会は75年前の1951年10月28日、琉球大学講堂にて開催され、感染症・寄生虫・結核を中心とした16演題が発表されたと記録されています。さらに遡ると、第二次世界大戦前の1911年にも第1回沖縄医学会が開かれていました。先達の旺盛な向学心と教育への情熱が築き上げたこれまでの歴史を思うと、深い敬意と感謝の念が湧いてまいります。このたび伝統ある学会の会頭を拝命し、田名毅沖縄県医師会会長、砂川博司医学会会長、ならびに学会担当の皆様、会員の皆様に心より御礼申し上げます。

さて、近年は多様な専門領域で高度な学術講演会が数多く開催され、最新の知見を得る機会が格段に増えました。特に生成AIの急速な発展により、効率的かつ迅速に学べる環境が整いつつあります。一方で、情報過多の時代にあって、正しい情報を選び取り、いかに活用するかが問われています。このような状況の中で、本学会をどのように魅力ある形で継承していくかを考えるとき、本学会が医療知識の習得にとどまらず、他分野との接点を持ち、互いに直接交流できる貴重な場として次世代へ引き継がれていくことを願っております。

今回のプログラムは、少子高齢社会の進行という大きな潮流の中で、特に沖縄県の現状に焦点を当てた内容となっています。まず、「意思決定支援の倫理を再考する～意思決定支援から共同意思決定へ～」と題し、金城隆展先生に、

医療現場における意思決定支援という難題についてご講演いただきます。自らの意思決定すら難しい場面で、他者の意思決定をどのように支援するか、ともに考える機会となるでしょう。

続いて、中山章先生には「沖縄県における薬物非行の状況について 少年鑑別所の現場から」として、報道でも取り上げられる沖縄の若年者の薬物乱用の現状を、現場の視点からご報告いただきます。午後には、仲宗根哲先生より「脆弱性骨折から考える沖縄県の骨折診療—病態解明・治療戦略・予防への展開—」について、県内の現状と課題をご提示いただきます。最後に、中矢代真美先生から「沖縄県における小児救急医療の歴史と持続可能な体制構築に向けた構造改革」と題し、小児科医不足の中で時間外受診者数が最も多い小児救急の現状についてご講演いただきます。いずれも、県民性や医療に対する価値観を見つめ直し、課題を抽出して、より良い医療提供につなげる契機となる内容です。

また、沖縄県は魅力的な研修ができる地域の一つです。特徴ある研修プログラムを求めて県内外から研修医が集まり、切磋琢磨する風土があります。研修医のみならず指導医も熱のこもった議論を交わす研修医部門の発表は、本学



会の大きな魅力です。学会発表の登壇門として、多くの医師が県医学会で初めて発表の機会を得てきたのではないのでしょうか。真摯に向き合った症例から得た学びを共有し、記録として残すことは、医師個人のみならず、共に働く仲間にとっても貴重なクリニカルパールとなります。

世界情勢は戦争や自然災害など不安定さを増し、その影響で物資不足や人材の偏在・不足など、医療現場にも多くの困難が生じています。病院運営も厳しさを増す中で、私どもは「足る

を知る」姿勢を持ち、現状を最大限に活かす工夫と協力を生み出していかなければなりません。本学会での学びと交流を通じ、医療現場のピンチをチャンスへと転じるヒントが得られることを期待しております。

最後に、本学会の開催にあたりご尽力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、沖縄県医師会および会員の皆様とともに、沖縄県の医療向上のために責務を果たしていく決意を述べ、ご挨拶いたします。

## 日本専門医機構認定共通講習（抄録）

【医療倫理：1 単位】

### 「意思決定支援の倫理を再考する ～意思決定支援から共同意思決定へ～」



琉球大学病院 地域・国際医療部  
特命助教 金城 隆展

昨今、最期まで自分らしく生きるための意思決定支援の切り札として注目されている ACP の形骸化が懸念されている。すなわち、かつて患者と医師が情報を共有し、問題についてよく話し合い、共に悩みながら共同で決定していくプロセスとして導入しようとした IC が、医療者を守るためにしなければならない法的手順になってしまった（＝形骸化）ように、本来もしもの時に備えて自分（患者）が望む医療やケアについて、家族や医療者と共に前もって考えて

#### P R O F I L E

（学歴）

1995 年 ラ・シェラ大学 学士課程  
（専攻：臨床心理学）卒業  
2000 年 ロマリダ大学 修士課程  
（専攻：生命医療臨床倫理）卒業  
2008 年 大阪府立大学大学院 人間文化学研究所  
比較文化専攻 単位取得退学

（学位論文）

ナラティブエシックスと共同著作 その理論と実践に関する哲学的考察  
大阪府立大学大学院、2009 年 博士（学術）

（職歴）

2000 年 9 月 ロマリダ大学医学部クリスチャンバイオエシックスセンター  
2009 年 3 月 東京大学大学院医学系研究科 特任研究員  
2009 年 4 月 琉球大学医学部 非常勤講師  
2009 年 7 月 大阪府立大学人間社会学部 客員研究員  
2011 年 4 月 群馬大学医学部 非常勤講師  
2011 年 6 月 琉球大学医学部附属病院 特命一般職員  
2018 年 4 月 琉球大学医学部附属病院  
2020 年 10 月 琉球大学病院 特命助教  
（現在に至る）

（賞罰）

2010 年 11 月 21 日  
生命倫理学会 平成 21 年度 若手論文奨励賞  
「倫理コンサルテーションとナラティブの能力」生命倫理、第 21 号、p.4-12、2010.

話し合うプロセスである ACP が、医療者側の都合で「事前に決めておくこと」が目的となる事前指示と見做されて普及してしまうのではないかという懸念である。

本講演ではまず ACP 登場の背景、および、IC・事前指示・リビングウィル・ACP の概念を整理した上で、事前指示は ACP の一部であって ACP そのものではないが故に同意ではないはずの両者が同じものだと見做されるとき、ACP の形骸化が始まるということを概説する。事前指示には解釈の余地が常に残るといふ本質的な難点があり、その難点を補うためには患者・家族・医療者が事前によく話し合いを行い、周りの人々が患者のことをよく知っておくこと（相互理解）が肝要である。なぜ患者の相互理解が重要なのか？それは患者本人が自分の意思を表明することができない場合に、その意思を周りの人々が推定するために重要であることに加えて、非専門家である患者／家族と専門家である医療者が共に悩み、共に考え、共に決定していく（＝共同意思決定）上で、患者の相互理解は必要不可欠だからである。なぜなら、

1) 非専門家と専門家の間には決して埋めることのできない知識と経験の溝があり、2) これまで IC という橋をかけて溝を乗り越えようとしてきたが（自分たちを守る最低限の倫理としては機能しているがしかし）、患者の幸福を目指す最大限の倫理としては十分に機能しているとは言い難いという現状を打破するために、3) これまで専門家である医療者が一方的に情報を提供し、患者／家族がそれに同意するという仕方を逆転させて、まずは ACP を介して患者の価値観・必要性・希望を教えてもらい（患者の相互理解）、それを実現するための選択肢を医療者側が逆提案することで、非専門家である患者／家族と専門家である医療者が共に意思決定することが可能になることを提案する。

最後に ACP が私たち専門家に求める三つの覚悟があるということ、それらはすなわち、1) 患者を置き去りにせずに、患者を中心とした医療を実践する覚悟、2) とことん話し合う覚悟、そして 3) 共に悩み考え、共に決定していく覚悟が求められているということを皆さんと共に考える時間としたい。



## 教育講演①（抄録）

# 「沖縄県における薬物非行の状況について 少年鑑別所の現場から」



那覇市少年鑑別所 首席専門官  
中山 章

少年鑑別所とは、刑務所や少年院等と並ぶ法務省所管の施設であり、非行に及んだ少年を収容し、家庭裁判所の裁判官による処分決定に寄与する鑑別の実施を主要な業務としています。鑑別とは、「少年がなぜ非行をしたのか、その要因や問題点を明らかにするとともに、改善・更生の手立てを示すこと」と言えます。少年鑑別所では、心理職である法務技官と、教育職である法務教官が勤務しており、対人援助職の専門家として、各々の専門性を生かして業務を担っています。

鑑別の業務を通して、那覇少年鑑別所に収容された少年の最近5年間の非行に関連する問題性の特徴として、以下の点が認められます。

1 全国と比較すると、家庭における貧困、虐待等の問題を背景に、15歳以下の低年齢の在所者の割合が高く、早い時期から児童相談所への係属、児童福祉施設への入所歴があるなど、問題性が深刻なケースが多い。

2 発達障害傾向を有する者や知的能力に制約がある者等が多い。また、在社會時から精神科通院中の者、入院歴がある者が少なくなく、在所中の心情安定、精神薬の服薬など、処遇上配慮を要することが多い。

## PROFILE

### （最終学歴）

平成9年3月 琉球大学 法文学部  
社会学科 心理学専攻

### （職歴）

平成9年4月 鹿児島少年鑑別所で採用  
平成14年4月 長崎少年鑑別所 専門官  
平成20年4月 福岡刑務所 調査専門官  
平成25年4月

～令和3年3月 鹿児島少年鑑別所、福岡少年鑑別所、那覇少年鑑別所等において、統括専門官として勤務

令和3年4月 熊本少年鑑別所 首席専門官  
令和5年4月 福井少年鑑別支所 支所長  
令和6年4月 現職（那覇少年鑑別所 首席専門官）

### （免許・資格）

平成31年3月 公認心理師

3 薬物非行による入所人員が増加している。違法薬物の乱用のみならず、薬物の購入費等、小遣い稼ぎに密売を行う者がいるほか、「売人」とその購入者という形で知己関係にある者が複数同時に入所するなど、集団処遇で配慮を要することが多い。違法薬物の乱用に伴う体調不良を訴える者も少なくない。

とりわけ、薬物非行に関して、当所の統計を見ると、従来から有機溶剤や覚せい剤、大麻等を乱用する者はいましたが（平成20年代は、おおむね年間10名前後で推移）、令和3年以後、大麻の乱用が薬物非行の中心を占めるとともに、薬物非行による入所人員が急増しています（令和3年以後は、おおむね年間30名前後で推移）。最近では、「ゾンビたばこ」、「笑気麻酔」と称されるエトミデートの乱用によって中学生が人所するなど、当所でも、現在、沖縄県下で深刻な社会問題化している薬物非行の低年

齢化・蔓延化の一端がうかがわれます。

多くの医師の方々にとって、少年鑑別所と関わる機会は少ないと思われますが、今回の講演の機会に、当所で見られる薬物非行の状況に関

して説明させていただくとともに、違法薬物の乱用からの回復及び薬物非行の防止等を図るために、当所との連携・協力をお願い申し上げます。

## 教育講演② (ランチョンセミナー) (抄録)

# 「脆弱性骨折から考える沖縄県の骨折診療 一病態解明・治療戦略・予防への展開一」



琉球大学 整形外科  
診療准教授 仲宗根 哲

高齢化の進行に伴い、骨粗鬆症を背景とする脆弱性骨折は、沖縄県においても日常診療で直面する重要な運動器疾患となっている。なかでも脆弱性骨盤骨折と大腿骨近位部骨折は、高齢者の移動能力、自立度、生命予後に大きな影響を及ぼし、介護負担や医療資源の観点からも地域医療における対策が急務である。

本講演では、脆弱性骨折を「なぜ骨折するのか」「どのように治療するのか」「いかに再骨折を防ぐのか」という骨折診療の視点から捉え、これまでに取り組んできた臨床研究、画像解析、有限要素解析の知見をもとに概説する。脆弱性骨盤骨折では、臨床データ解析と有限要素解析を組み合わせることで、骨盤輪における荷重伝達の破綻という観点から骨折発生機序を検討してきた。また、保存療法には疼痛遷延、離床遷延、ADL低下の課題がある一方、経皮的骨盤

## PROFILE

### (学歴)

2000年3月 琉球大学 医学部医学科 卒業  
2009年4月 琉球大学大学院医学研究科 入学  
2013年3月 琉球大学大学院医学研究科 卒業

### (職歴)

2000年 琉球大学 医学部 卒業  
同年 琉球大学 整形外科 入局  
2000年 沖縄県内の連携病院で研修  
2004年 湘南鎌倉人工関節センター 1年間のフェロー  
大学院進学 琉球大学大学院医学研究科所属  
(国内留学) 大阪大学整形外科特別研究員 (ヒップクリニック)  
2013年 博士号取得  
2015年 琉球大学 整形外科 助教  
2015年 Stanford University 留学  
(visiting assistant professor) (4か月)  
2015年 同年に講師  
2024年4月 琉球大学 整形外科 診療准教授  
現在に至る

### (免許)

平成12年5月 医師免許取得  
平成25年3月 医学博士  
日本整形外傷学会評議員  
日本股関節学会評議員  
日本人下関節学会評議員  
日本CAOS学会評議員  
日本人工関節学会認定医  
AO Trauma 上級会員  
厚生労働省難治性疾患研究班 特発性大腿骨頭壊死症 研究班  
寛骨臼回転骨切り術研究会 世話人  
沖縄関節外科研究会 代表世話人  
日本整形外科専門医

スクリュー固定術は低侵襲で早期離床を可能とし、機能回復に寄与することを示してきた。さらに、ハイブリッド手術室におけるリアルタイム画像を用いたナビゲーションの活用は、安全性と正確性の向上に寄与し、高齢者骨盤骨折治療の新たな選択肢となりうる。

大腿骨近位部骨折では、疫学的特徴の把握に加え、有限要素解析により骨密度低下や骨折型が術後安定性、術式選択、インプラント選択に及ぼす影響を検討してきた。特に大腿骨頸部骨折では、骨質と骨折形態に応じた固定法選択の重要性が示され、術前計画の高度化に資する知

見が得られている。治療においては、骨折部の固定だけでなく、骨粗鬆症治療、転倒予防、早期リハビリテーション、多職種連携を組み合わせる視点が重要である。

脆弱性骨折を単なる高齢者外傷としてではなく、骨質低下、荷重環境、全身状態を背景に生じる全身性疾患の局所表現として捉え直すことが、再骨折予防と健康寿命延伸につながる。今後の沖縄県における骨折診療では、低侵襲治療、骨質評価、骨粗鬆症介入、再骨折予防を一体化した診療体制の構築が求められる。

## 教育講演③ (抄録)

# 「沖縄県における小児救急医療の歴史と持続可能な体制構築に向けた構造改革」



沖縄県立南部医療センター・こども医療センター  
副院長兼母子センター長 中矢代 真美

沖縄の県立病院は、日本復帰直後の深刻な医師不足という歴史的逆境のなか、一次から三次までの救急を「断らない」体制を築き、離島県の隅々にまで質の高い医療を届ける使命を全うしてきた。特に小児科に関しては沖縄県立南部医療センター・こども医療センターが県民の「子どもの医療を沖縄の中で完結させたい」という切実な願いと署名活動の結晶として誕生し、小児救急・高度医療を支え続けてきた。

しかし現在、かつては誇るべき理念であった「断らない医療」が限界を迎え、小児医療体

## PROFILE

### (最終学歴)

平成 5 年 3 月 岡山大学 医学部 卒業

### (職歴)

平成 5 年 5 月 沖縄県立中部病院 研修開始  
平成 8 年 4 月 沖縄県立宮古病院 小児科 医師  
平成 10 年 4 月 沖縄県立中部病院 小児科 医師  
平成 12 年 7 月 米国デンバー小児病院  
小児循環器臨床フェロー  
平成 14 年 7 月 沖縄県立中部病院 小児科 医師  
平成 18 年 7 月 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 小児循環器内科 医師  
平成 22 年 4 月 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 小児循環器内科 部長  
平成 30 年 4 月 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 小児科部長  
令和 2 年 4 月 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 医療部長  
令和 3 年 5 月 沖縄県病院 事業局 医療企画監  
令和 7 年 4 月 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 副院長兼務母子センター長

制そのものが崩壊の危機に瀕している。本県の14歳以下人口割合は16.9%と全国1位を誇る一方、小児科医の偏在指標は全国47都道府県中44位(令和5年度)と極めて低い水準にある。

需要と供給のバランスが構造的に崩壊している  
うに、本県には一次救急に特化した「夜間休  
日診療所（一次救急の受け皿）」が皆無である。  
そのため地域で二次小児救急の役割を担ってい  
た病院の小児科勤務医にも過度な負担が集中し  
ている。過酷な夜間診療の負担により、県内総  
合病院の70%で5年前と比べ小児科医が減少  
している。またその結果、本来は三次救急を担  
うべき当院の救命救急センターに軽症患者が殺  
到し、重症患者の受け入れに支障が来している。  
地域における救急以外の一般小児医療や高度専  
門医療までもが危機的な状況にある。

この窮状を打破するため、当院では小児一次  
救急の段階的な受診適正化に向けて具体的なア  
クションを起こすこととした。第一に、一次救  
急受診希望者へ新たな選択肢として、小児オン  
ライン診療との連携を始動させた。さらに、単一

病院への負荷集中から脱却するため、那覇市立  
病院との間で小児救急の「輪番制」協定を締結  
し、地域全体で面として小児医療を支える持続  
可能なモデルへ踏み出している。

小児科の危機は、産科や救急など他分野にも  
波紋を広げる地域医療全体の危機の前触れであ  
る。沖縄県の未来を担う子どもたちの命を守り  
続けるためには、一医療機関の自助努力だけで  
は限界がある。今後は、一次救急の負担軽減に  
繋がる「オンライン診療」の全県的な活用体制  
の整備や、若手医師のリクルート・定着を図る  
ための「小児科医に特化した確保策」を、県の  
医療政策として具体的に取り上げていくことが  
不可欠である。本講演では、持続可能な小児医  
療の提供に向けた、診療科の垣根を越えた全県  
的な役割分担と連携について考察したい。

## 一般講演 演題・演者一覧

### < 口演部門 >

#### 沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）Ⅰ

- 1 症状と検査所見の解離を契機に身体診察と過去の  
診療録の再評価から確定診断に至った神経サルコ  
イドーシスの1例  
友愛医療センター 朝比奈 佳南
- 2 脳梗塞に隠れた、多発アテローム性血管病変を有す  
る左鎖骨下動脈盗血症候群の1例  
中頭病院 臨床研修科 神山 佳奈
- 3 レボフロキサシン内服経過のある若年性結核性胸  
膜炎  
沖縄協同病院 初期研修医 内間 日向
- 4 古典型ホジキンリンパ腫患者が血球貪食性リンパ  
組織球症を合併した一剖検例  
中部徳洲会病院 高橋 一輝
- 5 繰り返す問診と身体診察が診断の鍵となった感染  
性心内膜炎の1例  
沖縄県立宮古病院 臨床研修センター 下地 美寧
- 6 難治性心室細動の原因検索に、十二誘導心電図の連  
続モニタリングが有用であり冠攣縮性狭心症の診  
断に至った1例  
浦添総合病院 長尾 来夢
- 7 喘息やCOPDとの鑑別を要した再発性多発軟骨炎  
の1例  
ハートライフ病院 渡久地 ジュリ亜
- 8 中枢神経系合併症を起こし対応に苦慮した重篤な  
感染性心内膜炎の1例  
沖縄県立中部病院 総合内科 野村 優

#### 沖縄県医師会医学会賞（研修医部門）Ⅱ

- 9 前額部腫脹を契機に診断し得たPott's puffy tumor  
の一例  
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター  
研修センター 赤嶺 雅斗
- 10 一過性の眼痛で受診し、段階的な動眼神経麻痺の進  
行から診断に至った内頸動脈-後交通動脈分岐部動  
脈瘤切迫破裂の一例  
沖縄県立中部病院 初期研修医 仲地 ユリナ
- 11 救急外来では確定診断に至らなかったが身体所見  
と臨床経過から強く疑い、CT胆道造影にて診断に  
到った超急性期の急性胆嚢炎の一例  
大浜第一病院 武島 義一
- 12 超音波検査による評価が診断・治療方針決定に有用  
であった上腸間膜動脈解離の1例  
浦添総合病院 研修管理センター 比嘉 康明
- 13 肋骨骨折後に発生した乳び胸に対し胸管結紮術を  
施行した症例  
沖縄赤十字病院 初期研修医 村上 大地
- 14 慢性組織球性絨毛間腔炎による早発型重症胎児発  
育不全となった1例  
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター  
研修センター 池松 優花
- 15 妊娠33週で深部静脈血栓症と診断された1例  
友愛医療センター 初期研修医 佐久田 朝己
- 16 腸管子宮内膜症の一例  
琉球大学病院 総合臨床研修・教育センター  
金子 美羽

- 17 髄膜炎へのアンカリングにより診断が遅延したくも膜下出血の一例  
南部徳洲会病院 総合診療科 水谷 仁大

#### 腎・膠原病

- 18 TNF 阻害薬治療中の関節リウマチに発症し歯肉炎を伴った抗 MDA-5 抗体陽性皮膚筋炎—早期血漿交換療法奏効例  
那覇市立病院 内科 平良 彩
- 19 短期 CKD 教育入院における多職種連携の試み  
那覇市立病院 腎臓・リウマチ科 上原 圭太
- 20 沖縄県における透析医療の 50 年 (1971-2020) : 沖縄透析研究 50 (OKIDS50)  
名嘉村クリニック 井関 邦敏

#### 産婦人科

- 21 リスク因子の乏しい妊婦に発生した癒着胎盤の一例  
友愛医療センター 産婦人科 仲本 真利子
- 22 当院において緊急手術を実施した卵巣茎捻転の症例の検討  
友愛医療センター 産婦人科 大城 大介
- 23 子宮付属器捻転との鑑別を要した小腸絞扼性腸閉塞の 1 例  
友愛医療センター 初期研修医 上井 由佳
- 24 多発子宮筋腫の病理学的所見より遺伝性平滑筋腫症腎細胞癌と診断された 1 家系  
那覇市立病院 ゲノム診療科 仲村 理恵

#### 消化器 (外科)

- 25 高肥満率かつ胃癌低罹患率である沖縄県におけるロボット支援下胃切除術  
中頭病院 消化器一般外科 小野 武
- 26 大腸がんが進行がんが悪化する要因 : 分析的横断研究  
北部地区医師会病院 検診科 岸本 拓治
- 27 術前 TNT による直腸癌治療成績の検討—当科 22 例の経験—  
那覇市立病院 外科 上江洲 一平
- 28 腸閉塞症状を契機に発見された肝転移を伴う横行結腸癌の 1 例  
南部徳洲会病院 當山 郁馬
- 29 子宮体癌術後の直腸転移の 1 例  
友愛医療センター 外科 川満 彰吾

#### 神経内科

- 30 サーフィン中の鈍的外傷による外傷性椎骨動静脈瘤の一例  
琉球大学病院 脳神経外科 與那嶺 達也
- 31 取り下げ
- 32 那覇市立病院におけるウェルニッケ脳症 16 例の臨床的特徴  
那覇市立病院 総合内科 安澤 由香利

#### リハビリテーション科

- 33 重症心身障害児 (者) における血清 25-hydroxy-vitamin D (25OHVD) 値と日光暴露の関連性についての検討  
名護療育医療センター 玉城 邦人
- 34 先天性上肢欠損に対する筋電義手診療の経験  
沖縄第一病院 神谷 武志

#### 呼吸器 (外科)

- 35 植物デンプン由来の吸収性局所止血材による臓側胸膜炎が疑われ肺剥皮術を施行した 1 例  
中頭病院 呼吸器外科 大田 守雄
- 36 2 度の追加切除および放射線治療を施行した右第 2 肋骨軟骨肉腫の 1 例  
中頭病院 呼吸器外科 嘉数 修
- 37 左自然気胸を発症し多発肺嚢胞を認め BHD 症候群が疑われた 1 例  
中頭病院 呼吸器外科 新垣 雄大
- 38 肺膿瘍治療歴を有する右肺分画症に対し胸腔鏡下区域切除を施行した 1 例  
中頭病院 呼吸器外科 荒谷 真子
- 39 左迷走神経由来神経鞘腫に対するロボット支援下核出術の 1 例  
中頭病院 呼吸器外科 佐村 優衣
- 40 気管ステント留置を要した縦隔原発非セミノーマ胚細胞腫瘍の一例  
琉球大学病院 第二外科 當山 昌大

#### 呼吸器・総合診療科

- 41 新型コロナウイルスワクチンの副反応—総論の試み—  
那覇市医師会 会員 久田 友治
- 42 セフトリアキソン投与後に新規胆泥・胆石を呈し胆石性膵炎へ進展した維持透析中高齢患者の 1 例  
南部徳洲会病院 総合診療科 徳永 あかり
- 43 中核病院における HIV 外来新規立ち上げの実践と課題—プライマリ・ケアにおける多職種連携の視点から—  
那覇市立病院 総合診療科 湧川 朝雅
- 44 肺病変や好酸球性副鼻腔炎を呈した好酸球性炎症の背景にカルボキシメチルセルロース (CMC) アレルギーを認めた症例  
沖縄赤十字病院 初期研修医 石丸 鈴夏

#### 感染症・総合診療科

- 45 Mycobacterium kansasii 症の 3 症例  
国立病院機構沖縄病院 呼吸器内科 久田 友哉
- 46 琉大医学部 3 年生の西崎病院および関連施設での実習評価  
西崎病院 総合診療科 山城 清二
- 47 取り下げ
- 48 局所麻酔薬中毒の確証を欠く循環虚脱に対し、脂肪乳剤により速やかな回復を得た一例  
浦添総合病院 麻酔科 中村 咲樹



医学会賞 (研修医部門) 表彰式

### 循環器 (外科・内科)

- 49 90 歳代の重症大動脈弁狭窄症に対して右小開胸による大動脈弁置換術を施行した 1 例  
中部徳洲会病院 心臓血管外科 谷野 優葵
- 50 閉塞性肥大型心筋症を合併した狭小弁輪を伴う大動脈弁狭窄症の一例  
浦添総合病院 心臓血管外科 松尾 豪也
- 51 最近経験した急性心筋梗塞後心室中隔破裂 (VSR) の 3 例  
浦添総合病院 心臓血管外科 盛島 裕次
- 52 Coral Reef Aorta に対して VIABAHN VBX を用いて血管内治療を行った 1 例  
琉球大学大学院 医学研究科  
胸部心臓血管外科学講座 比嘉 章太郎
- 53 広範な肺塞栓に対して下大静脈静脈フィルターを留置した症例  
沖縄赤十字病院 医局 武村 桃子

### 血液

- 54 当院における ATTR 心アミロイドーシスの診断「ピロリン酸心筋シンチグラフィ検査のための地域連携の重要性」  
那覇市立病院 循環器内科 間仁田 守
- 55 当院における再発難治多発性骨髄腫に対するエルラナタマブ治療  
那覇市立病院 血液内科 内原 潤之介
- 56 当院で経験した芽球性形質細胞様樹状細胞腫瘍の 3 例  
沖縄赤十字病院 友寄 毅昭
- 57 造血幹細胞移植治療中の ALL 患者における電気刺激療法の効果  
琉球大学病院 リハビリテーション科 名嘉 太郎

### 精神科

- 58 精神科入院治療における急性肺塞栓症—心肺停止から蘇生された 1 例を通して  
田崎病院 精神科 小林 裕人
- 59 島しょ診療における医療連携・オンライン診療について  
オリブ山病院 仲里 尚実
- 60 大学病院におけるオンライン診療の導入と有用性—児童思春期精神科診療を中心に—  
琉球大学病院 精神科神経科 石橋 孝勇
- 61 反復経頭蓋磁気刺激療法 (rTMS 療法) 自験例 64 例の解析  
あかりクリニック 中村 明文

### 一般外科

- 62 抗凝固療法中に発症した十二指腸壁内血腫に対する外科的戦略  
沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 加藤 堇
- 63 当院におけるハブ咬傷 174 例の治療経験  
沖縄県立北部病院 外科 古澤 慎也
- 64 成人外鼠径ヘルニアに対する LPEC (Laparoscopic Percutaneous Extraperitoneal Closure) の中長期成績  
ハートライフ病院 外科 西原 実
- 65 超音波ガイド下四手整復法 (FROGS) 後に施行した腹腔鏡下閉鎖孔ヘルニア修復術の一例  
中部徳洲会病院 小粥 康平
- 66 ロボット支援鼠径ヘルニア修復術の導入と初期成績  
中部徳洲会病院 ヘルニアセンター 井谷 史嗣
- 67 国民皆保険下に於ける形成外科の歩みと現状 (第 1 報、終戦から本土復帰迄)  
当山美容形成外科 當山 護



#### ◇医学会賞 (研修医部門) I

- 最優秀賞: 下地 美寧先生 (沖縄県立宮古病院 臨床研修センター)  
「繰り返す問診と身体診察が診断の鍵となった感染性心内膜炎の一例」
- 優秀賞: 長尾 来夢先生 (浦添総合病院)  
「難治性心室細動の原因検索に、十二誘導心電図の連続モニタリングが有用であり冠攣縮性狭心症の診断に至った一例」

#### ◇医学会賞 (研修医部門) II

- 最優秀賞: 池松 優花先生 (沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 研修センター)  
「慢性組織球性絨毛間腔炎による早発型重症胎児発育不全となった一例」
- 優秀賞: 赤嶺 雅斗先生 (沖縄県立南部医療センター・こども医療センター 研修センター)  
「前額部腫脹を契機に診断し得た Pott's puffy tumor の一例」